

新・瘠我慢の説

経済学者
渡辺利夫

第二十七回 満鉄初代総裁——残照の中の後藤新平

後藤新平といえは満鉄経営の先駆者であり、満鉄の基礎を築いた人物であるかのようにいう人は少なくない。だが、後藤自身はそう語ってはいない。あれほど自己顕示欲の強い後藤の口から聞こえてくるのは、愚痴、不平、憤懣、怒りばかりである。台湾総督府民政長官時代の語り口や文章のなかで輝いていたあの明朗さは満鉄時代の後藤からは完全に消え去ってしまった。

満鉄総裁を誰にするか。元老、げんろう重臣は一致して後藤を推挙した。台湾での後藤の実績をよく知っていたからである。後藤自身も当初は満州経営に

ついでの関心は強く、事実、ポーツマス条約の締結の直前に、戦争を勝利に導いた児玉源太郎に祝意を伝え、労をねぎらうために奉天の満州軍総参謀部の児玉を訪れ、日露戦争後の満州をどう経営すべきかについて意見を交わした。「満州経営策梗概」という後藤の文書が残されている。「ポーツマス条約締結以前ニ於ケル故児玉大将立案」と付されている。日時はない。後藤が死せる児玉を装って自説を簡潔に述べたものであろう。現代文でまとめたいえはこうである。

「日露戦争後の満州経営の最も重要なポイント

は、表では鉄道経営の仮面を装い、裏ではさまざまな政策を施してこれを実行することにある。このポイントを踏まえて租借地内の統治機関と獲得した鉄道の経営機関とはまったく別個のものとして扱い、鉄道の経営機関は鉄道以外の政策や軍事にはまったく関係ないものごとく「仮装」しなければならぬ」

満州経営論の嚆矢はおそらくこの文章なのに違いない。実際の満州経営が大筋でその方向に進んでいったのであるから、これは後藤の画期的な文書の一つだといつていい。

日本の指導部が憂慮していたのは、ロシアに復讐戦を挑まれるという悪夢であった。あの巨大なロシアが満州という僻遠の地で敗北したからといって、それで完全に諦めてしまふとは考えられない。ならばいまのうちに容易には崩すことのできない日本の権益基盤をここで固めておかなければならない。日露戦争勝利は継戦能力ギリギリのところであらう。手にした拾いものではなかったか。この思いは兎玉

にも後藤にも同じく強いものであった。

満鉄の総裁として西園寺公望首相以下の閣僚は、いずれも後藤の名前をあげた。しかし後藤は満鉄を総括する「中心点」、つまり満鉄を監督する権力の中核が不明であるようなところにいくのはいかなものか、そう考えて固辞をつづけた。満州で手にしたものは遼東半島の租借地であり、ここを統治しているのは軍部である。おびただしい数の兵士の犠牲を支払って得たこの地から軍人の力を排除することはきわめて難しい。後藤はこのことを直視して総裁職就任を固辞した。西園寺にその旨を伝え、兎玉にも自分の意思を伝えておかなければならないと同日に参謀本部を訪れた。この時二人の間でどんな話し合いがなされたのか。後藤の「南満州鉄道総裁就任の事由書」には兎玉が次のように語ったと記されている。

「日露戦争は満州での一戦をもって終了したのではない。第二の日露戦争がいずれやってくる。日本に勝算がある時には先んじてロシアを制し、勝算

が立たない時には自重して機を待つ。たとえ日露が再び相まみえて日本がこれに勝つことができなかつたとしても、いずれかの時期を狙うには満州においてつねに日本が主となり、ロシアを客として扱ふことが必要である。安逸に過ごしてはわれわれは将来大変な苦勞を嘗めさせられよう。日本が主となり得るか否かは何より鉄道経営の巧拙いにかんにかかっているとは、そもそも後藤君、君の意見ではなかつたか」

別れ際に児玉は「後藤君、君は自説に拘泥しすぎていやしないか。できないという方向ではかり事を考えるんじゃないか、やってみようという方向で頭を巡らせてみてはどうかね」と語つたともいう。

しかし後藤の固辞は石のように硬かつた。それでも後藤は児玉から聞き逃したことが何かあるんじゃないか、心残りが燻つて児玉邸のほうに足を向けかけたが、夜ももう遅い、日を改めようと自宅に戻つた。翌朝、児玉邸に電話を入れると、児玉は就寝中に脳卒中に襲われそのまま息を引き取つ

たという。駆けつけた後藤は、一室に白い布をかぶせられた児玉の遺骸に接してただ悔悛の思いに苛まれるのみであつた。存命であれば断ることもできたが、死せる児玉の主張を呑まないわけにはいかない。いじらしいばかりの思いで後藤は「重い合戦」を挑むより他なしとして、総裁就任の諾を出した。

着任して半年ほどを過ぎたあたりからの後藤の文章には、次第に愚痴や怒りが満ちてくる。軍部の力に抗することはどうにもかなわない。旅順を占領する日本陸軍は圧倒的な存在として君臨しており、海軍の鎮守府も旅順におかれていた。軍人を制する者は誰もいない。

旅順、大連を含む遼東半島の先端部が関東州である。ここを総括するものが関東都督府であつたが、軍部の圧力を前に容易に機能しない。後藤の次の文章などは不平不満というよりは罵倒のようにも感じられる。論点は満州経営の「中心点」の不在についてである。

「都督府に対する中央政府の態度は一定せず、そ

の方針を明らかにすることもなく、万事が姑息、一事を糊塗するだけのものである。満州のことについて誰が責任を負うというのか。都督府に対する政府の見解が定まっていなかったために、各省の偏見がせめぎあい、その結果、都督府の権限を削り、かつ予算を縮小してついに都督府は廃するよりはあつたほうがまだましという程度のものにしようとしているのではないか

満鉄総裁に着任して以来、いや兎玉の急逝によって翻意を余儀なくされるまでずっと抱かされてきた満鉄経営方針の不在、これを後藤は難じているのである。

「どうしてこんな呪われるべきポストに就いてしまったのか」

明治四十一年七月四日、後藤は「満鉄十年計画」を奏上、その直後に逋信大臣に就任した。満鉄総裁の座は台湾総督府から連れてきた中村是公に譲つて、あつさり辞任。在任期間はわずか一年八カ月であつた。

後藤の闘争心は台湾時代に火がついて燃え上がったが、満州時代には燃え尽き、その後は内務大臣、外務大臣、東京市長、再度の内務大臣と権力はたつぷりと手に入れたものの、台湾時代にみせたような達成感は得られず、つねに不全感に苛まれていたのではないか。

「生物学の原理」にもとづく諸政策を台湾社会の深部にまでいきわたらせることに満身の力をこめ、統治開始後十年で台湾の財政自立を達成させるといふ目を見張らせるような成果を残した。これが後藤の語るべき政治的人生のポイントであり、のちに手にした権力はすべて台湾時代の成果の「残照」のようなものだったのではないか。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長を歴任。八五年、「成長のアジア 停滞のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、開発経済学で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞受賞。二〇一一年、正論大賞。